

乙女のままじゃいけない！

目次

プロローグ	はじまりはいつもどどん底	5
第一話	少女漫画の限界は、べろ入れなしのキスまでです	18
第二話	やっぱ、乙女は朝チュンでしょ	129
第三話	少女漫画の鉄板、幸福の後の突き落とし	225
第四話	最高のラブストーリーの終わり方	253
エピローグ	ハッピーエンドの続きとは	296

プロローグ はじまりはいつもどんどん底

人生から完全に消し去りたい――

切り取って、シュレッダーにかけて、いや、それでも足りない。

いっそ溶鉱炉で灰も残らないほど焼きつくして、最初からなかったことにしたい。

そんな思い出が、誰しもひとつやふたつはあるだろう。

「これ……あの、私の、気持ちです」

顔から火が噴き出しているようだった。肌だけでなく、目からも鼻からも、耳からも。その炎はジェット飛行機の噴出口から出るそれに似ていて、ややアニメチックな色味で、効果音はポーツ。

そんな風に、何もかも二次元のビジュアルにして考える癖が、十七歳の坂谷由南にはあった。

「ん、……俺？」

その人は、訝しげに顔を上げた。

塾の国語講師、篠原柊哉。講師といってもアルバイトで、年頃は――多分、大学生くらい。

すらっとした長身で、顔が小さくて脚が長い。顔立ちは端整で、目鼻だけを見れば、そこの女

性より美しく女性的。

髪は少し長めで襟足えりあしが隠れるくらい。手首と指の形が綺麗で、時計はシルバーのクロノグラフ。塾講師のアルバイトなんかより、モデルでもすればいいのに——と、誰もが思うほどのイケメンである。

当然、塾での篠原の人気は凄まじかった。彼の講義には女生徒の申し込みが殺到し、一時いつときなど、女子の間で「篠原番」なるものが作られて、交代で彼へ差し入れをするという——そんな決まり事まで出来たほどだ。

とはいえ、その異常なまでの人気は徐々に沈静していき、彼の講義が始まって半年経つ頃にはすっかり下火になっていた。

理由は、当の篠原がそうだった騒ぎに無関心で、その上冷淡なまでに愛想のない男だったこと。そしてもうひとつ、その篠原に結婚を約束した彼女がいるという噂がまことしやかに流れたこと——篠原人気下落した最大の原因は、むしろ後者の方である。

ただ由南だけは、その噂が嘘であることを知っていた。そして、一見無愛想で冷淡な篠原が持つ、意外に熱い一面も知っていた。隠れた優しさも——知っているつもりだった。

その篠原は、今、講義が終わった後の教室で、首をかしげながら由南に手渡された封筒の裏表を確かめている。

「タイトル、未定……?」

それは封筒の表に、由南が書いた文字である。訝いぶかしげに呟つぶやいた篠原は、眉を寄せて由南を見上げた。

「何、これ」

「てっ、適当な題名がなかったんです。そ、それは後から先生が——いえ、とにかく、開けてみて下さい」

「まあ、いいけど……」

それきり、由南は顔を上げられなかったから、以降の篠原の表情は見ていない。

夕暮れ。二人しかない教室。椅子が軋きしみ、篠原が組んでいた長い脚を解いて立ち上がる気配がする。

なんていうブランドの靴だろう。篠原の靴はいつも新品みたいにピカピカに輝いていて、上着だけ立派だけど靴はどこかくたびれている他の塾講師とは、それだけで全く違う人種のような気がした。

心臓の擬音ぎおんは、とつくんとつくん。

どきどきどきどき……でも悪くない。きゃー、心臓、破裂しちゃうよー。そんなモノログをつけてもいいだろう。もちろん全部、今の状況を二次元化——つまり漫画化した場合の話である。

これが篠原以外の誰かだったら、間違いなくドン引きされるであろうものを、今、由南は彼に渡したのだ。

——大丈夫、篠原先生は大丈夫。絶対に受け止めてくれるはず……

うつむいたまま、由南は祈るように自分に言い聞かせていた。

——大丈夫、先生だけは、私の思いを分かってくれる。

だって今まで会ったどんな人より、私を理解してくれた。たくさんの勇氣と自信をくれた。
（お前が坂谷由南？ 先週提出してもらった小論文のことで話があるんだけど、いいかな）

ひたすら地味に、隅っこで息を潜めるようにして授業を受けていた由南に、彼が目を止めてくれただけでも奇跡だった。その上、二人きりで親しく話が出来ようになるなんて——こんな奇跡以上の出来事を、なんと表現すればいいのだろう。

帰国子女だった由南は、それまでずっと日本語で会話するのを避けていたし、この地方独特の言い回しやイントネーションにも馴染めなかった。日本に戻ってきた直後に、言葉遣いのせいでイジメにあったからだ。その時は、一時ではあるが不登校にもなった。

すっかり自信を失くして自分の殻からに閉じこもっていた由南に、篠原だけが手を差し伸べてくれたのだ。

（お前さ、もっと自分に自信を持てよ）

（人と上手く喋しゃべれない？ 心配するな、俺とはちゃんと話せてるだろ）

篠原もまた打ち明けてくれた。女性と話すのをあまり楽しいと思ったことはないが、坂谷だけは違うなど。だから、私にとって彼は特別で、彼にとつても私は、多分少しばかり特別な生徒に違いない。

祈りにも似たその思いが、由南に今日の——無謀とも言える行動をとらせたのかもしれない。

篠原の長くて綺麗な指が、封を開いて内容物を取り出し出している気配がする。

「……………ん？ もしかして、……………漫画？」

驚きのためか、普段は低く響く篠原の声が裏返った。由南は即座に反論していた。

「漫画じゃないです。コミックです」

「何それ、どういう区分」

どうって言われても、感覚というかこだわりというか。

「ま、漫画って言ったらオタク臭いけど、コミックって言ったらカジュアルでお洒落しゃれな感じがするじゃないですか。——絶対に忘れないで下さい。そこ、すごく大切なポイントですから」

それもまた、海外から戻ったばかりの頃のトラウマが、少しだけ関係している。

当時、イラストを描くのが密かな趣味だった由南は、大学ノートに漫画のキャラクターを描き始めた。そのノートをうっかりクラスメイトたちに見られ、大笑いされた挙句に言われたのだ。
（坂谷さんってオタクだったんだ。キモーい）

「……………よく分からないけど、少女マ……………あ、いや、コミックね」

頭に蘇よみがえったセリフを由南が打ち消している一方で、篠原は言いにくそうに訂正した。

「それにしても、生原稿なんて初めて見たな。ふうん……………どこでこんな手に入れたわけ？」

「私が描いたんです」

パラパラとページを捲めくる篠原の手が止まった。

「描いたって、自分が？」

こくり、と由南は頷く。驚かれるのは想定内。けれど篠原は、決して馬鹿にはしないはずだ。

「これ全部？ お前が一人で？」

再度由南は頷いた。

「嘘だろ？ マジで？ いや、すごいのはすごいけど、これ、どんだけ時間かけたんだよ」

その声には、予想もしなかった非難の色が混じっていた。

「ああ、そういや思い出した。以前、確かに言ってたよな。漫画——コミック作家になるのが坂谷の夢なんだっけ。気持ちは分かるけどお前さ、受験生が今の時期、こんなもん描いてんなよ」

うつむいた由南は、思わず「え？」と、瞬きをしていた。

なんかそれ、反応違うくないですか？

由南が、ひた隠しにしてきた自分の夢を、目の前の男に打ち明けたのは先月の半ばのことである。

（私は、恋愛漫画家——れ、恋愛コミック——ラブコミック作家になるのが、夢なんです！）

それがあまりに意外だったのか、篠原はたっぷり五秒は瞬きを繰り返していたようだった。

（恋愛漫画家——そんなジャンルがあったんだ）

（そんなジャンルはないですけど、その——平たく言えば少女漫画のことですよ。恋愛をテーマにした乙女向け漫画……コミックのことです。読んだ人が私もこんな恋愛がしたいと心から思えるような、そんな最高の恋愛漫画……ラブコミックを描くのが、私の昔からの夢なんです）

（へえ、いいじゃん）

その時、目の前の男はとても優しい目をして、こう言ってくれたのだ。

（俺は漫画とか読まないけど、その年で夢がはっきりしているのはすごいと思う。頑張れよ）

なのに何？ 今の、若干非難するような口調は。

今、由南が篠原に渡したのは、二十四ページの描き下ろし漫画原稿である。

そこに由南は、この数カ月、ずっと胸に秘めていた彼への思いを込めたのだ。告白を、少女漫画という形にして。

多分、両思いになることは考えていなかった。

胸にためこんだ彼への思いが溢れて、自分でもどうしようもなくなって——その気持ちを漫画で表したいという衝動が抑えきれなくなったのだ。

それは、タイトルのないラブストーリーで、同時に篠原への熱烈なラブレターでもあった。

コピー本にしようかとも思ったが、あえて情熱の全てを注ぎ込んだ泥臭い生原稿を持参した。だって、ラブレターをコピーして渡すなんて、ありえないと思ったからだ。

漫画としてジャンル分けすれば、コミカルだけど切ないラブストーリー。これを描きながら、由南は何度も感情移入して泣いた。篠原への恋心を全部、何もかも余さずに描き込んだつもりだった。が——

「……ふ」

ページを捲った篠原が、かすかに噴き出した。

「あ、いや……ごめ、……え、てか、これ——俺？ 俺の名前？ なんで？ それで相手が坂谷？ ちょっと待てよ、これ——、マジでウケるんだけど！」

横を向いた篠原は、耐えかねたように笑い出した。

由南は、悪い夢でも見ているような気持ちで、その笑い声を聞いていた。彼が声をあげて笑うの

を見たのは初めてだ。冷静な皮肉屋だと思っていたけど、こんな笑い方もできる人だったんだ——
「ちょ、ごめ……。いや、悪気はないんだけど、マジで」

そう言いながら口を拳で押さえ、懸命に笑いを堪える初恋の人の足元を、由南は暗い穴に突き落とされたような絶望の中で見つめていた。

この残酷な反応で、彼にその気がないことはよく分かった。それだけではない。大爆笑された。悪夢みたいだ。それが、生まれて初めてした告白への反応だなんて。

二分割されたページの半分は黒ベタ、その隅っこで逆さまになって落ちていく女の子——の図。由南は、この状況をコミック化してしまうことで、懸命に自分を立て直そうと試みた。でもそれは、どうしてもコミカルな形になってくれない。

何度か咳払いと深呼吸をして、ようやく篠原柊哉は原稿用紙を元通りに封筒に収めた。

その間由南は——一度も顔を上げられなかった。

「ちょ——悪い。これ、冷静に読めそうもないんで、一人でじっくり読ませてもらうってもいいかな」
「——……は、い」

出来れば今すぐ、その原稿を返してほしかった。今、篠原に対しては失望の気持ちしかない。夢を見すぎていたことがやつと分かった。一人で馬鹿みたいに暴走していた。

由南の漫画の中の篠原であれば、絶対にこんな残酷な対応をしたりはしない。つまり彼は、少女漫画のヒーローではなかったのだ……

失望まったただ中の由南をよそに篠原は素早く原稿を入れた封筒を抱えると、「じゃ、次の講義が

あるから」とそそくさと教室を出ていった。

——最悪……

どうせ振るつもりなら、今すぐあつさり断つてくれればいいのに。

せめて、笑わないでいてほしかった。振るなら振るで、真剣に向き合ってほしかった。

自分でも乙女すぎる告白だとは思ったが、それでも篠原なら——自分の夢を初めて打ち明け、それに真摯に答えてくれたあの人なら、受け止めてくれると信じていたのだ……

今となっては、妄想と熱に浮かされたこの一カ月を、ドブに捨ててしまいたいくらいだが、本当の悲劇は、その夜の講義の終了後に訪れた。

数学の講義を終えた由南が帰ろうとした時だった。先に講義が終わったはずの隣のクラスに、やたら人だかりが出来ている。

「すげー、これ漫画？ 生原稿？」

「坂谷由南と篠原柊哉って、Vクラスの坂谷と、国語の篠原のことだろ？ 何これ、なんで漫画に出てくるキャラが、この二人なわけ？」

「だから、これ、その坂谷が描いた漫画なんだって」

「漫画の中で、篠原に告って両思いって……キモっ、どんだけ乙女な妄想してんだよ。『ドキドキしちゃう……』だって、篠原先生が好きだから。ぶっ、寒いよ。寒いつつーか、痛い、マジで」
どっと、笑い声が教室内に満ちた。

「篠原、職員室で大爆笑。そりゃこんなの渡されたら、笑うしかないよな」

彼らの足元で、原稿を入れていた封筒が踏みじられ、しわくちゃになっていた。「篠原先生へ」。封筒に記した文字に泥のついた軌跡が重なっている。由南はただ、棒みたいに立ちつくしていた。

「坂谷、いい気になってたもんね。篠原に優しくされてるからって」

「あれ、塾長命令だつて聞いたよ。坂谷が塾辞めそうだから、なんとか気を引いて引き止めるつて。あの子、東大確実なんでしょ？ 辞められたらマジで大損らしい」

なんだろう。この会話。もしかして、夢だろうか。

そうだ、夢に違いない。そうでなければ、私は異世界に迷い込んでしまったのだ。

しかし耳を突き刺すような残酷な会話は、なおも続く。

「坂谷も、頭いいくせに馬鹿だよねー。多分騙されちゃったんだよ。篠原、彼女いるのにさあ」

「え？ 婚約してる彼女がいるとかつてやつ？ それ、生徒を近寄らせないための嘘じゃないの？」

「違う違う。英語の吉永。勘のいい子は気づいてたよ。だつてジャンプの匂いがいつも一緒。」

篠原が吉永のマンションに入つてくの、私も一度見たことあるし」

「篠原つてああ見えてかなりなボンビーなんだつて。吉永も結局は、カモられてるんでしょ」

その間も、由南の漫画は次々と嘲笑の中で回し読みされている。

「押すなつて。焦らなくても、これ、もうコピーしたやつが出回つてっから」

気がつけば由南は、声を出さずに泣いていた。歯を食いしばり、拳を口に当てるようにして、ぽたぽたと涙を零し続けていた。

騙されていた。嘘だつた。私だけに向けられていると思つた優しさも、言葉も、あれは全部――

彼の仕事で、上辺だけのものに過ぎなかったのだ。

なんであんな男を好きになったんだろう。なんでその気持ちを漫画になんかしたんだろう。私は

なんて馬鹿だつたんだろう――

それから後のことは、由南はよく覚えていない。

学校にも同じ塾の子が持ち込んだのか、由南の描いた漫画のコピーはあつと言う間に広まった。

塾にはその日を最後に行かなかつた。学校にも、多分その翌週ぐらいから行かなくなつた。

どういう精神状態だつたのか今でもよく分からないけど、部屋に閉じこもつて、やたらハッピーな少女漫画ばかり描いていた。描いて描いて、描きまくつた。

両親は毎晩泣いていた。どこで事情を聞き知つたのか、塾にも抗議の電話をしていたようだった。「いったい何で、そんな無神経な真似をしてくれたんですか。由南は帰国子女で、転入した中学校では周りに馴染めず、随分長いこと不登校だつたんです。学区外の高校に入って、ようやく落ち着いてきたのに……それを、何もかも目茶苦茶にして！」

由南にしてみれば、とうの昔に消し去つた過去をそんな風に親が暴露してしまったことの方が堪らなかつたし、もう二度と塾にも学校にも行けないという気持ちが余計に強くなつた。

当然、塾の方からも電話があつたし、塾長と篠原が揃つて謝罪に来たこともある。その際篠原が、自分がかうっかり他の生徒に見せてしまったのが原因だと謝つていたことも聞いた。

由南は顔さえ出さず、電話にも出なかつた。というより、もう篠原は由南の人生から切り離された男だつた。少女漫画にふさわしくない最低男。もはや、記憶の底にすら残したくない。

あんな男に恋をして、あまつさえ恋愛漫画のヒーローに見立てていたなんて——
 言ってみれば、当時の由南は、彼への怒りだけで生きていたのかもしれない。その憤りをぶつけ
 るように、極端にハッピーで明るい恋愛漫画ばかりを描いていたのかもしれない。とはいえ、後か
 ら何度振り返っても、当時の心境だけは自分でも掴み切れないのだが。

「あ、私、祥雄社のユノハラです。温泉に野原の原でユノハラね。おたく、坂谷由南さんですか？」
 そんなおかしい電話が東京の出版社からあったのは、事件から二カ月後——秋も随分深まった頃
 だった。

「へえー、高校三年生なんだ。じゃあ受験？ よかったら東京に出てこないかなあ。ああ、言い忘
 れました。君の投稿してくれた作品『恋してダーリン』だけど、『週刊ラブリー』来週号に掲載が
 決まったから。いやあ、人気次第だけど、編集部では好評だね！ 君、絵もストーリーも本当に上
 手いね。タイトルとかベタだし、若干話が古い気もするけど、まあ、何が受けるか分からないのが
 この世界だから」

その瞬間、由南は真つ暗だった自分の人生に、初めて一縷の光が射したのを見た。

「行きます。東京」

由南は受話器を握り締めたまま、即答した。

「私、東京で漫画家になります。祥雄社さんのお世話になります！」

夕食の時間だった。背後では、両親が同時に茶碗をテーブルに置き、中学生の弟が飲んでいたお
 茶を吹き出した。

「え、いやあ。そういう意味に取られてもアレだけど。ほら、厳しい世界だから売れなかつたら仕
 事入らないし、コミックス出せずに終わる人も大勢いるし、てかほとんどそんなばかりだし。そ
 れでも——いや、決して積極的に誘ってるわけじゃないよ？ それでもよければ東京に出ておいで」
 この軽薄そうな編集者が、これから漫画家になろうとする高校三年生の少女の人生に、これっぽ
 ちも責任を取る気がないのはよく分かった。

それでも由南にとっては、東京からのこの電話こそが地獄に垂らされた蜘蛛の糸だった。

しがみついて、這い上がりたい。そしてズタズタになった人生を、完全にリセットするのだ。

「かまいません。貯金下ろして、明日にでも行きます。即収入になるアシスタントの口があったら、
 紹介してもらえませんか」

由南はきつぱりと言いつつ切った。

「由南、あんた一体——」

「おい、代われ。相手は誰だ。今すぐお父さんに電話を代われ」

それから数日続いた喧騒もまた、由南にとっては思い出したくない過去のひとつである。

でもそんな風にして、由南の最悪な——人生で一番悲惨だった高校生活は、唐突に終わりを迎え
 たのだった。

「先生……坂谷先生」

夢の中を彷徨^{さまよ}っていた由南は、その声に弾かれたように顔を上げた。

はっとする。瞬^{まばた}きをして目をこする。現在^{いま}はいつでここはどこ——？　そしてすぐに気がついた。

ここは、東京神田、祥雄社ビルの六階。『ラブリー』編集部内にある打ち合わせスペースである。「寝られてました？　もしかして」

机を挟んだ向かい側には、若い男の顔があった。

立花瞬^{たちばなしんぐん}。『ラブリー』編集部^たの編集者で、去年入社したばかりの新人である。

思わず唇を押さえた由南は、涎^{よだれ}の有無を確認してから、こみ上げた欠伸^{あくび}を呑み込んだ。

「ごめんなさい。実はあまり寝てないんです。今日持ってきたネームを作るのに、明け方近くまでかかったから……」

そう言うと、たちまち立花は大袈裟^{おおげさ}に眉を上げた。

「うわあ、それはほんつと、すみませんっ。本来なら僕がご自宅にお伺いしなければいけないとこ

ろを、こうやって先生自らおいいただきましたっ」

日焼けサロンでこんがり焼けた肌^くに、耳には三つ並んだピアス穴。見た目は典型的なチャラ男である。それだけでも十分頼りないのに、加えて、祥雄社社長立花一心^{たちばないつしん}の甥^{いむ}という曰^{いわ}くつき。

昨年立花が「新人で何もできませんし、右も左も分かりませんが、これからよろしくお願^{ねが}いします！」と、甘えているとしか思えない挨拶回りをしに来た時、由南は内心思ったものだ。

——こんなのに担当されるようになったら、私も、もうお終^{しま}いだな。

翌年の春、立花は由南の担当になった。

「何しろ坂谷先生は、十年以上のキャリアを持つベテラン大先生ですからね。しかも祥雄社の星。少女漫画界のトップランナーですよ。そんな大先生に、打ち合わせの度にわざわざ編集部にまでおいでいただくなんて、全^{ぜん}くもって——」

立花の薄っぺらい賛辞^{さんじ}の言葉を、由南はしばらく辛抱^{しんぼう}して聞いていた。今までの経験から言うと、これは何か言にくい話をされる時の前兆^{ぜんせう}だ。連載を切られるとか、ネームがボツになったとか。が、今の由南は連載も持っていないし、このネームも今日持ち込んだばかりである。今度はなんの話だろう。

それから二度、立花の軽薄な口から『十年以上の大ベテラン』という言葉が出た後、ついに由南は堪^たりかね、飲んでいた紙コップのコーヒーを机に置いた。

「あの、まだ九年ですから」

「へ？」

「十七歳でデビューしたから、今年でまだ九年目です。十年、届いてないですから」

「えっ、あ、あー、そうでしたっけ？ すみません。でも、感覚としては十年ですよ。だって、それだけ長く『別冊ラブリー』で描いてらっしゃるのは、先生くらいじゃないですか！」

「……最初の六年は『週刊ラブリー』、本誌の方です。別冊で描いた期間は、せいぜい三年くらいだと思いますけど」

失言の上塗りに気づいたのか、立花はうろたえたように視線を泳がせた。

「そ、そうでしたっけ。最初は週刊。ああ、そうですね。後から別冊に移られたんですよ」
一体、この説明をしたのは何度目だろうか。受け持ち作家の情報くらい押さえておくのが常識だろうに、立花にはそのあたりの職業意識が見事なまでに欠落している。それどころか、本当に少女漫画が好きかどうかも怪しいくらいで、立花の少女漫画の知識といえば、ここ数年のヒット作に限定されているのだ。

今の受け答えだけでも相当腹立たしいのに、何を勘違いしたのか、立花はあらゆる方向で自分の失言をフォローしようと思いついたようだった。

「ま、まあ、あれですよ。別に本誌で描くのが全てじゃないっていうか。確かに本誌から別冊に移ると、雰囲気としては都落ち、みたいな感じはしますけど、別冊には別冊の良さというか、魅力みたいなものがあるじゃないですか！」

いいことを言ったでしょとばかりに、したり顔をする立花に、由南は辛抱しんまうの微笑を返した。

由南がデビューした少女向け漫画週刊誌『週刊ラブリー』は、隔月で別冊を発売している。名称

は『別冊ラブリー』。人気作家の連載作品も多少は掲載されているが、概ね新人か、売れ行きの落ちた中堅の活躍の場とされている。つまり立花の言う通り、週刊誌で描いていた作家が別冊に移るというのは、どうしても都落ちした感が否めないのだ。

由南は再度嘆息し、コーヒーを飲み干してから、手帳などをバッグに収めた。

「とにかくそのネーム、問題なければ、今月の連載会議に回して下さい。そろそろ私も読み切りでなく、長期連載で話を描きたいです」

「はい、いや、それはもう。連載枠に空きが出た時は毎回、坂谷先生が第一候補に挙がってますからー！」

——その割には、出た空きはいつも他の子に回されているような気がするんだけど……

その疑念を力のない立花に伝えたところで仕方がない。由南は重い腰をあげて立ち上がった。

「あっ、先生っ」

やはり本題が他にあつたのか、立花が慌てて腰を浮かせた。そして、言いにくそうに口を開く。

「すみません。実は、あといくつか確認しておきたいことが——先月、お電話でお話しさせていたいただいた、電子書籍の件ですが」

それか——と由南は思った。

あまりヒットせず、実質絶版状態になったコミックスを、電子書籍化してはどうかという話。

「そのお話なら、お断りしたはずでは？」

柔らかく、けれどきつぱりと即答すると、うつ、と立花が言葉に詰まった。

「私にとつて、漫画はあくまで紙ベースなんです。前から言ってますけど、コミックスの電子書籍化の話はもう私にしないで下さい」

「わ、分かりました。いや、分かっています。それはもう、ハイ、結構です」
慌てて追従した立花は、すぐに媚を売るような笑顔になった。

「えーと、じゃ、もうひとつ。来月頭にある、祥雄社漫画賞の授賞式ですけど、出席の方は……」
それには、由南は少しばかり露骨に溜息をついて向き直った。

「出ませんよ。自分が受賞するならともかく、私にはなんの関係もない式でしょう」

「で、ですよー。まあ、他の作家さんはお祝いがてら出席されたりしますんで、一応」

へらつと笑った立花は、しかし、ますます物言いたげな表情になった。

「それ——からですね。先月、この場でご提案させていただいた件なんですけど、前向きに、ご検討いただけただけでしょうか！」

先月、この場——つまり、前の打ち合わせの時。

ようやく立花の本来の目的を察した由南は、初めて、不機嫌をはつきり顔に出した。

「それこそ、即行で断りませんでしたっけ」

立花は救いを求めるように周囲を見回したが、諦めたようにひきつった笑顔を由南に向ける。

「その……ご存じの通り、ですね。『別冊ラブリ』の購読者層は、週刊本誌より少しばかり年齢が高めなんですよ。なんていうんですか？ もうキスだけの恋愛じゃ物足りない、みたいな」

「セックス描写は絶対にお断りですよ」

わざとらしくおどける立花に、由南はぴしゃりと言つてのけた。

「いや、それは分かっています。先生のポリシーというか、高邁な理想みたいなものは、前任の者からよく聞いています。でも、でもですね」

「いえ、そちらの言い分は結構です」

由南は、口調を強くして遮った。

言つては悪いが、このほんくら低能編集者に、由南はそれでも最大限譲歩し、気を使っているつもりである。腐つても社長の甥。将来、祥雄社の幹部になるのは必至だからだ。

が、作品の内容——殊に、性描写に関してのアドバイスだけは、別だった。

全く、昨今の少女漫画ときたら——嘆かわしいにも程がある。あからさまな性描写、薬、性病、暴力などなど。由南に言わせれば、絶対に描いてはいけないことてんこ盛りだ。

十代の若者をターゲットにした少女漫画には、絶対にこれ以上描いてはいけないという一線がある。最近の漫画にしか目が行かない立花のような若い編集者には、その境界が分からないのだ。

由南は、たとえ自分が孤立しても、自身が信じる限界だけは堅守すべきだと思つていた。

「立花さん、少女漫画なんです。私が描いているのは少女漫画。乙女向けの恋愛漫画です。まだ十代の少女相手に、婚前セックスを奨励するような漫画を、大人の私が描けると思いませんか？」

「いや、何も、奨励しろ、とは」

「そう言っているも同然じゃないですか。そんな——無駄にセックスとか入れなくとも、私の漫画はストーリーで読ませることができんです。セックスだけ描けば売れるんですか。売れるためな

ら、セックス描いてもいいんですか」

「ちよつ、せ、先生つ、せ、セックスとか、そう連呼しないで下さいよ」

立花は、もう真っ赤になっている。三つある打ち合わせスペースと編集部の間を仕切っているのは、薄いパーティション一枚きりだから、多分二人の声は丸聞こえだ。

パーティションの向こうから、慌てた態で副編集長の大場が飛び込んできた。

「先生、何もそんな大きな声で——持ち込みに来た新人が、びっくりしてるじゃないですか」

そして大場は、立花の腕を引っ張るようにしてパーティションの外に連れ出した。

「おい、坂谷先生の作品にダメ出しは不要だって言っただろ。先生には先生のポリシーがあって、一度ごねられると、そりゃあ面倒なことになるんだから」

「いや、だって、編集長の命令で……」

「だったらもつと、上手く話を持っていけよ。それも編集の腕の見せ所だろ！」

そういう話は、出来れば私の聞かえないところでやってほしい。

無能と無神経の相乗効果で、さすがに由南は怒りを抑え切れなくなつて歩を進めた。

パーティションの外に出ると、立花と大場がぎよつとした目で振り返る。

「せ、先生。以前も僕の方から説明しましたが、電子書籍の台頭に伴う近年の出版不況の中、『別冊ラブリー』を大人の女性向けにシフトしていこうというのは、社として出した方針です——」

「お断りです」

由南は、追いつがる大場を睨みつけた。

「いくら売り上げが違おうが、流行りだろうが、ポリシーは絶対に変えません。何をどう言われても、私の作品にセックス描写は入れません。いいですか、少女漫画の限界は、べろ入れなしのキスマイまでです！」

2

——全く、冗談じゃないわよ。

由南は憤慨しながら祥雄社を後にした。

性愛描写——そんなものを描くために、少女漫画家になつたわけじゃない。恋愛の、一番きれいで純粹で美しい部分。由南が描きたいのは、そんな青春の情景を切り取つたようなラブストーリーだ。その先にある生々しい現実なんて、各々の想像で十分ではないか。

携帯電話が鳴つたのは、そんな憤りを持って余しながら地下鉄の駅に向かつている時だった。

ちょうど大型電気店の前で足を止めると、店頭に並べられた数台のテレビが、一斉に同じニュースを流し始めた。携帯をバッグから取り出しながら、由南は何気なくテレビ画面に視線を向けた。

『インターネットサービス国内最大手である株式会社ウイキャンが、ゲーム会社アリコンに敵対的買収を仕掛けている件で、先日、就任したばかりのウイキャンの新社長に注目が集まっています』

へー、アリコンが買収されるんだ。

世情にとことん疎い由南でも知っているその会社は、かつて携帯ゲーム業界では世界のトップシ

エアを誇っていた有名企業だ。そんな大手が、ウイキャンとかいう某国大統領の口癖みたいな会社に買収されてしまうなんて——さすがに、時の流れをしみじみと感じてしまう。

携帯を耳にあてると、早速キンキン声が届いてきた。

「あ、由南ちゃん、俺、俺。今どこ？ もう会社出ちゃった？」

由南のことを、「由南ちゃん」などというセクハラ丸出しの呼び方をするのは、最初の担当者——現在では『週刊ラブリ』の編集長にまで登りつめた、温泉原仁だけである。

「聞いたよ。立花ちゃんとやり合ってたんだって？ 気持ちには分かるけど、立花ちゃんは腐つても社長のおとなだから。もっと優しく、丁寧に対応してやらないと」

うんざりしながら、由南は溜息を噛み殺した。

「もしかして温泉原さんも、立花さんと同じ用件ですか。だったら、もう切りますけど」

「まあまあ、まあまあ」

温泉原仁。この無責任で軽薄な男は、とにかく調子だけはよくて、人の心をなだめすかず術を昔から小狡く身につけている。

「そうカリカリしなさんなって。一体誰が由南ちゃんに意見なんてできるのよ。由南ちゃんは『恋してダーリン』でメガヒットを飛ばした祥雄社の英雄よ？ アニメ化、映画化、果ては華流ドラマ化までされた超ヒットコミックで、本社社屋の建て替えが出来たのも、全部『恋してダーリン』のおかげなのよ？」

分かっているならいいですけど——とは、さすがに面映ゆくて言えなかった。加えて言えば、温

泉原が編集長に昇格することができたのも、『恋してダーリン』の成功のおかげだと言われている。

「まあ、それは置いといて。実はさ、由南ちゃんに別の仕事の話があるのよ。覚えてるかな、『別冊ラブリ』と『週刊ラブリ』の合同企画の件」

一瞬眉をひそめた由南は、すぐに「ああ」と声に出した。

「チャリテイオークションのことですか」

「そうそう。アジアの恵まれない子供たちのために——ってことで、都の募金活動と提携した企画ね。うちの人気作家たちに、落札者を主人公にしたオリジナル漫画を描いてもらうっていう」

「まあ……覚えてますけど、それで？」

由南は、再び疲れがこみ上げるのを感じていた。

『ラブコミックオークション。あなたのラブロマンスを、人気作家が漫画にします！』
確か、そんなタイトルの企画だったはずだ。

恵まれない子供たちのためにという志は立派だが、よくもまあ、そんなくだらない企画を思いついたものだ。どうせチャリテイ好きの温泉原の思いつきだろうが、案の定さほど話題にもならず、入札期限は確かそろそろだったはずである。

「まあ、その件でね。今日が入札締め切りだったんだけど、由南ちゃんにも仕事を依頼することになりそうだから。明日くらいに、打ち合わせ、どうかな」

ああ、そうか。私も落札される作家の一人としてエントリーされてたな。

かすかに溜息をついてから、由南は携帯を持ち直した。

「その企画、じゃあ温泉原さんが私の担当をしてくれるんですか」

「うん、そう、そういうこと。一応、俺、由南ちゃんの育ての親だから」

その表現には若干抵抗があるが、由南は気を取り直して訊いた。

「ちなみに私、いくらで、どんな人に落札されたんですか」

受話器の向こうで、温泉原の「んー」という声と、がさが紙を捲る音がした。

「東北の主婦『恋してダーリン』のファンだって。落札額は——すごいよ？　なんと十一万八千円——
何をもつてすごいと言っているのか分からない。由南は、少しだけ首をかき上げて訊いた。

「ちなみに、今年、祥雄社漫画賞を受賞された秋葉ナナ先生は、おいくらだったんですか」

「先生」と一応はつけてみたが、内心そう呼ぶ度に重苦しい葛藤を感じている由南である。

『週刊ラブリ』の看板漫画家で、『妄想男子』がメガヒットを飛ばしている秋葉ナナは、由南の元アシスタントで、少しばかり因縁のある相手だからだ。

隠しても無駄だと思つたのだろう。温泉原はあっさりと残酷な事実を口にした。

「……あー、二百五十万。売れっ子作家はやっぱ違うね！　じゃ、明日、編集室で待つてるから」

地下鉄のガラス扉に、今の自分が映っている。

扉前のボールに寄りかかっていた由南は、ぼんやりとその姿に目をやった。

ノーメイク。前髪なしのひつつめ髪。度の強い黒縁眼鏡に、灰色のサマーニット。もう何年も穿いている夏用の七分丈ジーンズに、流行遅れのサンダル。手には銀行でもらったエコバッグ。

今時、ここまで身なりに構わない女子もきつと珍しい。が——十七歳の冬からこれまで、由南には、今以上に着飾らなければならぬ状況など一度としてなかった。

とにかく稼がなくてはならなかった。大袈裟でなく、生きていかなければならなかった。磨かなければならないのは外見ではなく、技術である。自分の全てを漫画という世界に注ぎ続け——そうして由南は、人気作家の座を手に入れたのだ。

（——坂谷は顔も頭もいいから、将来、どんな仕事にでも就けるんじゃないか？　笑うなよ。もつと、自分に自信を持って。お前は、本当に綺麗なんだから）

いきなり蘇った最悪な記憶のページを、由南は少しばかりの驚きと共に頭から追いやった。

そういえば、今朝も夢を見た。あの男——最低最悪の塾講師、篠原柊哉が出る悪夢を見た。

笑うなよ？　もつと自分に自信を持って？　私の何もかもを笑い飛ばしたくせによくそんなことが言えたものだ。だいたい、それを真に受けた私も私だ。そう、多分当時は少しばかり、自分に自信があつたのだ。本当の自分は今とは違う。そんな風に——思っていたから。

一時期モデル業をやっていたという母親に似たのか、由南は幼い頃から、どこにいても「綺麗な子だ」と言われ続けてきた。が、それもまた、帰国したばかりの中学では、イジメられる原因となつた。

だから高校では、あえて度のきつい眼鏡をかけて、髪も男みたいに短くしていたのだ。目立つことを恐れ、息をひそめるようにして生きていた。——そんな私を、篠原先生だけは……

はつと現実に立ち戻った由南は、ぶるぶると首を横に振った。いけない。また思い出しかけた。

見ない、聞かない、考えない。それが対篠原三原則だ。もう、過去は二度と振り返らない。

とはいえ現在、由南が全てを注ぎ込んだ仕事も、絶不調が続いている。

年齢でいえばまだ働きざかりにもなっていないのに、既にこの業界では、由南は過去の人だった。デビュー作がそのまま週刊連載となり、いきなりの大ヒット。またたく間にアニメ化、ドラマ化が決まり——多分その頃が、由南の頂点だったのだろう。体力も気力も知力も、自分の持ち得るものの全てを、由南はデビュー作である『恋してダーリン』に捧げ続けた。

が、栄枯必衰の理の通り、人気は永遠には続かない。それが一時、一世を風靡しただけに、落ち目になった『恋してダーリン』の末路は本当に惨めなものだった。

四年目に連載打ち切り。それから五本、由南はやつきになって新しい作品を連載したが、どれも二十話を前に打ち切りとなった。

そうして、落ちぶれた作家の例に漏れず、由南は『週刊ラブリー』から別冊に移り——しかしそこでも巻頭カラーは一度しか取れず、今では紙質の極めて悪い巻末あたりのページで、読み切りや短期連載を描かせてもらっているだけなのである。

一人で暮らす3LDKのマンションに帰宅した由南は、貯金通帳を見て溜息をついた。

別冊に移ってたった三年で、ここまで落ちぶれるなんて想像もしていなかった。年に数回程度の読み切りでは食べてすらいけないから、今はコミックスの印税だけが頼りである。それが、今年に入って激減しているのだ。

——早く連載始めないと、マジで干上がつっちゃうな。……本当に、なんとかしないと。

田舎の両親も、娘がここまで貧窮しているとは想像すらしていないだろう。何しろ『恋してダーリン』があれだけヒットしたのだ。左団扇で暮らしていると思われているのかもしれない。

確かに数年前の由南には、親のために家を購入し、なおかつ自分が一生食べていけるくらいの預貯金があった。

が、これも運なのだろう。当時、資金管理を任せていたスタッフが節税対策で行った数々の投資に失敗——使い切れないほどあつたはずの貯金は、あつと言う間になくなってしまったのだ。

「とりあえず、この部屋を引越しちゃうか……」

呟いて、由南はベッドに仰向けに倒れ込んだ。

もつと安い場所に移れば、経済的には随分と楽になる。少しは余裕ができるだろう。でもこの先、連載を持たなかったらどうなるのか。東京で生活すること自体、無理なのでは……

人前では強気に出られても、こうして部屋で一人きりになると不安と孤独にさいなまれる。

二十六歳、独身。恋人もいなければ、頼る友人もない。その上貧乏で人嫌いで、出無精。

どうしてこんな風になってしまったのだろう。分かっている。何もかも、あの男のせいだ。

篠原終哉——最低最悪の塾講師。あれ以来由南は、人が、特に男がまるで信じられなくなってしまうのだ。

——でも、少女漫画の世界の男は違う。

由南は起き上がり、戸棚の中から『恋してダーリン』のコミックスを取り出した。全二十四巻。その長さが示す通り、一卷と最終巻では、作風も絵柄も随分と変わってしまったている。

地味でドジな女子高生百花が、ある日、イケメンだが冷淡な数学教師沢村に「俺は、お前の将来の夫だ！」と迫られることから物語が始まる。実は教師には、ヒロインが妻だという以外、記憶を全て無くした謎の幽霊が憑依（ひょうい）して——先生と、幽霊との三角関係ラブコメディだ。

たまたま引き抜いたのは十二巻だった。ドラマ化も決まり、人気がピークだった頃の巻。

由南はページを捲（めく）ろうとして躊躇（ためら）うように指を止めた。不思議なことに、連載が終了してから何年も経つのに、いまだ『恋してダーリン』だけは読み返せない。稚拙（ちせつ）な絵が恥（は）ずかしいのか。自分の若さが恥（は）ずかしいのか——

しかし、そこに描かれている男主人公は、由南にとっては最高のヒーローのはずだった。

ヒロイン百花への愛に気づいた教師沢村は、以降、何があってもヒロインを裏切らない。陰日向（かげひなた）なく支え、守り、愛し続ける。そうして完全無欠のハッピーエンドを迎えるのだ。

全編爽やか青春路線で、ラブシーンといえば、軽いキス程度しか描いていない。それが物足りないという読者の意見はかなりの数に上ったようだが、由南はそれでも描かなかった。

『週刊ラブリー』のメインターゲットは、恋愛に憧れる十代の女の子たちだ。実際、十年くらい前の『ラブリー』に過激な性描写がある漫画はひとつもなかった。青春爽やかラブ路線。だから由南も、『ラブリー』の熱烈な愛読者だったのだ。

とはいえ今の主流は、男女間の性愛を前面に押し出すことなのだろう。他の作家の作品を見ても、キスは明らかに舌が入っているし、それだけならまだしも、セックスシーンで結合している姿まではつきりと描かれている。

由南はぶるぶると首を振った。無理。天地がひっくりかえっても、私には無理。だいたい自分の口や身体の中に他人の器官が入り込むって——普通に気持ち悪くない？

「少女漫画に、リアルな性愛描写は必要なのよ。現実じゃない、夢を描く仕事なんだから」

残酷な現実なんて少女漫画には必要ない。由南は呟（つぶや）いて、コミックスを本棚に戻した。

3

「ほんっとさー、マジ勘弁してほしいよ。元売れっ子だからって、我儘（わがまま）のなんのって」

『ラブリー』編集部。その扉の外で中の声を聞いていた由南の背後から、ひどく厭味（いやみ）な声でした。

「あら？ 坂谷先生じゃないですか」

鼻にかかったような甘く高い声。振り返った由南は思わず眉を寄せていた。

「奇遇ですね。滅多に仕事場から出ない坂谷先生と、こんな場所でお会いするなんて」

秋葉ナナ——元アシスタントだった女はそう言うと、由南を馬鹿にしたように見下ろした。

二十四歳。年は由南より二歳下で、身長は逆に十センチも高い。コミックスに自分の写真を堂々と載せるだけあって、誰が見てもまず文句のつけようのない美人である。

「ねえ、伊勢谷君？ 珍しくない？ 坂谷先生といえば、社のパーティにも出席しないほど出無（でぶ）精（しょう）な方（かた）なのに」

「ええ、そうですね」

そのナナの傍らに立つ長身の男が、訳知り顔で頷いた。その顔を見た途端、由南は自分の表情が強張るのを感じていた。

「久しぶりです。坂谷先生、お元気そうで何よりです」

伊勢谷保——色白の顔に眼鏡を掛けた優男。数年前まで、由南のアシスタント兼事務所スタッフだった男である。年は——あれから五年も経つから、もう三十近いだろう。

八年ほど前に由南は、アシスタント歴も長く、経理にも詳しいという伊勢谷を信用してスタッフに雇い入れた。が、結果として、由南はこの男の失策によって莫大な貯金をふいにしてしまったのだ。(せつ、先生、すみません、全部、先生のためを思ってたこと——)

泣きながら失態を詫びた男は、その翌年、あっさり秋葉ナナの仕事場に移った。

「チャリテイ企画の件で、温泉原さんに呼ばれたのよ」

嫌なところで嫌な相手に——と思いながら、由南は素っ気なくナナに答えた。

しかしこれで、扉の内側で、外に響くほどの大声で受け持ち作家の悪口を言っていた立花も気づくだろう。当の本人が今、外にしていることを。が——

「あの先生さあ、えらそーなこと言つてつけど、男性経験ゼロなんだよ。描かないんじゃないよ、描けないの。経験ないから、描きようがないんだよ」

あ、あの馬鹿——！

ばつと由南は顔を伏せたが、ナナと伊勢谷が顔を見合わせたのが分かった。

「てか、今時ディープキスが駄目ってどんだけ昭和の漫画家だよ。古いんだよ。話もキャラも、何

もかも昭和的。昔の作品は知らないけど、もう作風が時代合ってねーっつーの」

どこまで馬鹿なのか、立花はさらに声を張り上げる。

それが誰の話なのか察したらしいナナと伊勢谷が、揃って由南を見下ろした。

由南はかろうじてポーカーフェイスを保ちながら、悔しさを押し殺して顔を上げる。

少女漫画のシの字も知らない立花の意見など、由南してみれば鼻で笑う程度のものだが、そんな屈辱的なセリフを、人前で言われたことだけは許しがたい。

「ほんと……、運のない人ですね、坂谷先生って」

ふと見れば憐れむような目で笑ったナナが、扉に手をかけていた。

「縁故入社の無能な担当がついて、しかもあんな悪口言われるなんて、とことん可哀想。ま、運を引きつけるのも、実力の内ですけど？」

ナナが扉を開けた途端、ガタガタッと、いくつかの椅子が激しく音をたてるのが聞こえた。

「これはこれは、秋葉先生！」

「おい、立花、先生にお茶。いやコーヒー。いや、早くオーダーをお聞きして！」

たちまち温泉原や、大場や担当に囲まれたナナは、あたかも女王様のように、応接ソファの真ん中に腰を下ろした。差し出される灰皿とライター。まるで漫画のようなひとコマである。

「秋葉先生。祥雄社漫画賞、少女漫画部門の受賞、本当におめでとうございます」

次々と浴びせかけられる賛辞に鷹揚に頷き、ナナはバッグから煙草を取り出した。

「いつものドトールのコーヒーね。それからストロベリーチーズケーキも」

見ているだけで胸糞むねぐその悪い光景ではあるが、『妄想男子』で祥雄社漫画賞を受賞し、累計るいけい五百万部を誇るヒットを叩き出したナナである。周囲の扱いは極めて妥当たとうだ。

かつての由南が、まさにそんな立場だった。が、今は誰も由南のことなど気に留めていない。「気にしないで下さい。秋葉先生の口の悪さは、いつものことだから」

由南が所在なく入口の所に立っていると、後ろに立つ伊勢谷がいきなり声をかけてきた。

「え、ああ、……うん、別に気にしてないし」

由南は顔を背けるようにして、それでも平静を装って答えた。

「秋葉先生、売れるから、ちよっと天狗てんぐになってるんですね。まあ、若いし、周りに叱れるような人もいないから、それも仕方ないのかな」

その無責任な言い様にさすがに呆れた由南は、思わず伊勢谷を見上げていた。

だったら自分が叱ってあげればいいのに。そのナナより、年が五つも上なんだから——

「じゃ、僕は、経理の方と呼ばれているので」

おざなりに断つてから、伊勢谷は長身を翻ひんがした。そして、ふと思いついたように足を止める。

「坂谷先生は、もう連載はなさらないんですか」

強張こわばった由南の顔色を察したのか、伊勢谷は整った顔に取り繕つくろったような笑いを浮かべた。

「再来月あたり、別冊の連載枠がひとつ空く予定なのはご存知ですか？ どうも、うちのアシスタントをやっている夕風ゆづかぜ空が、そこで連載することが内定してみたんですよ」

由南は自分の表情が硬く強張るのを感じた。

「坂谷先生も候補だと、以前ちらつとお聞きしたことがあったものですから。——もし夕風で確定なら、新しいアシさんを手配しないと秋葉先生の仕事が回らなくなりますからね」

どういふことだろう。別の作家で内定なんて、昨日、立花は一言も言っただけじゃなかった。

「だからって、まさか坂谷先生に、秋葉のアシスタントはお願いできないですよええ。あははは」
強烈な皮肉を言った後に一人で笑うと、伊勢谷は丁寧に一礼してから踵かかとを返した。

何よ、それ。

信じられない。ずっと一緒にやってきた仲間のくせに、どうしてそんな厭味いやみが言えるわけ——？
それも秋葉ナナの影響だろうか。どうせ仕事上だけでなく、私生活でも二人はパートナーなのだ。

伊勢谷は長年由南の所にいたため、「坂谷先生、仕事も男も秋葉ナナに取られて可哀想」みたいな噂が漫画家仲間の間で流れていたようだが、それは由南には甚はなはだ迷惑な誤解だった。伊勢谷との関係は、職場の上司部下のようなもので、別に恋愛感情があったわけではないからだ。

「そりゃあもう、ダントツで秋葉先生が人気でしたよ！」

温泉原の耳障りなキンキン声こゑが、由南を現実じゆんじつに引き戻した。

編集部では、ナナを中心に、チャリティオークションの話題で盛り上がっているようだ。

由南は休憩用の長椅子に座り、ひとまずナナの用事が済むまで待つことにした。

「いや、秋葉先生なら、この程度は行くだろうと思ってましたけどね！」

「二百五十万ですよええ。四十ページでそれだから、すごい高額！ さすがは秋葉先生ですよ」

「……なんだか、描かせてもらう私が緊張しちゃう」

縦ロールにした盛り髪をいじりながら、殊勝げにナナは言った。もちろん、それが口先だけなのは、自慢げに緩んだ口元が雄弁に物語っている。

「他の方は？ オークションの結果って、見せていただけれるんですか？」

すかさず温泉原が巨体を翻し、まさに下僕のように恭しく、ナナの前にコピー用紙を差し出した。「へえ……、美早先生が、二百万ですかー、やつぱり『ケダモノ彼氏の事情』が凄い人気ですもんね。佐々木先生が百二十万、——え、温泉原さん？」

そのナナが、不意に綺麗に描いた眉を上げた。

「この数字、一桁違ってるんじゃないやありません？ 坂谷先生だけ、すごく額が低いんですけど！」

それまで、編集部の隅に置かれた長椅子に座り、見ざる聞かざる言わざるを決め込んでいた由南も、さすがに腹立たしさのあまり拳を握り締めていた。

「もしかして印刷ミスですか？ 十一万って……ちよつとありえないですよ、これ！」

ナナは一度も由南を見ていないが、絶対に意識して言ったに決まっている。

こんな風に、ナナは何かという自分と由南を比較したがるのだ。アンケートの得票数からコミックスの売上に至るまで、とにかく比較しつくして、徹底的に由南を貶めにかかる。

それだけならまだしも、どうやら漫画家仲間に由南の悪口を触れ回っているようで、おかげでもともと人づきあいが苦手だった由南は、作家たちの間ですっかり孤立してしまった。

由南自身は、ナナから恨みを買うようなことをした覚えは一度もない。それどころか、勘当状態

で家を飛び出してきたナナを、すぐにアシスタントとして雇い、デビューまで面倒を見てやった。

ナナのデビュー作が由南のパクリだと酷評された時だって、わざわざ由南自身が『ラブリ』のホームページで擁護のコメントを出したほどだ。それなのに——

「あ、いやあ、それは、まあ」

その場に由南がいることを承知していたのか、さすがに温泉原は言葉に窮したようだった。

「たまたま、ですかねえ。そういうこともあった、みたいな。ほら、坂谷先生は大家だから、競争率が高いつつことで、皆さん、敬遠されたのかもしれないですし」

「それはそれは、随分敬遠されちゃったんですねえ……。てか十一万って。これ、プロの取る数字じゃないですよ。もしかして、規定の原稿料より安くありません？」

「ま、まあ、今の流行とは、いい意味で逆を行く作風ですからね。坂谷先生は」

「それ、いい意味なんですか？ 評価されていけばいい意味でしょうけど、評価する人、いるんですか？ 別冊読んでると、坂谷先生のところだけ、なんだか時代が逆行していませんか？ 今時女子

高生のスカートが膝丈で、下駄箱にラブレターとか、ある意味ギャグ漫画路線なんですけど」

「いや……ちよつと……秋葉先生」

温泉原が困惑気味に止めに入る前に、由南は勢い良く立ち上がっていた。

さすがに堪忍袋の緒が切れた。というより、これはもう喧嘩をふっかけられているとしか思えない。

由南は、啞然としている温泉原を押しつけるようにして、ナナの正面に腰掛けた。

「何が言いたいんですか、秋葉先生」

今までは、ナナにどんなに挑発されても由南は無視を決め込んでいた。相手は子供だし、人気作家として調子に乗っている。相手にするだけ時間の無駄だと思っていたのだ。

が、今回に限って受けて立ってしまったのは——多分、そのナナの前で惨めに立花に陰口を叩かれてしまったのと、期待していた連載枠が他の作家に持っていかれたこと、そして、とどめのように伊勢谷に厭味めいた言葉をかけられたことのせいかもしれない。

「すみません。まさか坂谷先生がそこにいらっしやっただけなんて知らなくて。私、先生のファンですから、一読者として思ったことを口にしちゃっただけなんですよー」

そう言いながら、ナナは樂しげに足を組みかえている。由南はそんなナナを睨むようにして言った。「私は、昔と変わらないものを読者に届けているだけです。秋葉先生のように流行に合わせて作風を変えるやり方もあると思いますけど、変わらない良さもあると信じてますから」

「流行のリサーチをして今の時代の女の子に読ませる努力は必要だと思いますけど？ それを『流行に合わせる』って言うんじゃないですか？」

ナナは馬鹿にしたように眉を上げる。由南はさらにカチンときた。

「ええ。流行のリサーチは必要だと思います。ですが私が言っている『流行に合わせる』というのは、刺激が強い漫画が受けているからって、それに安易に乗っかるやり方です」

「ちょ、ちょっと、由南ちゃん」

会話の流れを察した温泉原が、慌てたように両手を振る。多分、ストップ、と言っている。

「聞き捨てならないですね。それ、どういう意味ですか？」

ナナの目が、むっとすがめられる。

「セックスを売りにした、十八禁ぎりぎりの刺激的な漫画、という意味ですよ」

由南はきつぱりと言いつつ切った。

しかし、ナナは笑いを嘔み殺すようにして煙草の煙を吐き出した。

「ねえ、前から思ってたんですけど、坂谷先生って、恋愛経験まるでないんじゃないですか？ 今時高校生の間でもキスだけで終わる恋愛なんてファンタジーだし、キスしたら、普通はセックスまでいきますよ。恋愛漫画って、そもそもその過程を楽しむものじゃないですか」

「キスしたらそうかもしれないけど、キスしない高校生だって、半分以上はいますよ。そういう子たちって、恋愛に幸福な夢を見てるんだから、少女漫画はある意味ファンタジーでいいんです」

「はあ……」と、ナナは呆れたように溜息をもらした。

「確かに仰る通りですけど、坂谷先生の漫画って最早幸福な夢ですらないんじゃないですか？ ストーリーが複雑で分かりにくい、そのくせ恋愛要素がなさすぎるって、うちのアシさんたちもよく言ってます。もう恋愛漫画を描くセンスみたいなものがなくなっちゃったんじゃないかって」

その言われ様には、さすがに由南はかっと頭を熱くした。

「じゃあ聞きますけど、恋愛漫画を描くセンスってなんですか？ ストーリーをきちんと描いて何が悪いのよ。小汚い彼氏の部屋でセックスして妊娠して、そういうとこまでリアルにドロドロ描いた作品、私は全然面白いとは思わないだけ」

「ちよつとちよつと、もう、やめて下さいよ。二人とも」

温泉原の制止をよそに、少し苛立ったようにナナは「だからあ」と言い返してくる。

「そういうの、受けてない漫画描いてる人が言っても全然説得力ないんですって。先生はご自分の作品で、いくらでもその理想を追求したらいいじゃないですか」

「説得力がなくて悪かったわね」

あまりにも人を馬鹿にした言い草に、由南はひどく感情的になっていた。

「言つとくけど刺激で人気を得た作品なんて、その刺激に慣れてしまえば、あつという間に飽きられるんだから。刺激頼みの少女漫画なんてただのエロ漫画よ。私は絶対に認めないからね!」

「あああ、もうっ」と叫びながら、温泉原が両耳を塞ぎながら立ち上がった。

「ちよつと——マジ勘弁して下さいよ! 二人とも」

「じゃあ、あんたも描いてみれば?」

脚を組み直したナナの目が、初めて鋭く由南を睨んだ。

「エロけりゃ受ける? 私がそんな甘えた考えで描いてると思つたら大間違いよ。描かないんじゃないわよ!」

ナナは、テーブルの上に入札結果をまとめた紙を叩きつけた。そして、つんつとそっぽを向く。

「もう私、『ラブリー』には描かないから」

「え、秋葉先生、何言つてんの」

慌てた態で、即座に温泉原がナナの傍らに膝をつく。

「例の話も、なかったことにして。今の連載も、あと十週くらいで終わりにして」

「ちよ、そんなっ、馬鹿なこと言わないでよ。ねっ、秋葉先生っ」

「例の話」の言葉に由南は引つかかったが、ここでは周知の話なのか、誰もそこに突っこむ者はいなかった。どうやらナナは、由南とは別の仕事の件で今日ここに來ていたらしい。

しかも、温泉原の様子を見るに、祥雄社にとつてはかなり重要な仕事らしいが——

周りが慌てる様が面白いのか、ナナはますますつけ上がる。

「こんな無礼な作家がいる雑誌に、私、もう何も描きたくないの。私に描いてほしいなら、謝らせよ。坂谷先生に、今、この場で土下座で謝罪させてよ!」

ばつとその場にいた全員が——ナナをのぞいて——由南を見た。それぞれの目が、無言の圧力と怒りを滲ませている。

売れない癖に余計なことばかり言いやがって。謝れ、早く。とつと秋葉先生に謝つちまえ。

温泉原が、両手をばちんと、目の前で合わせた。

「悪い、由南ちゃん、ここは、年上の由南ちゃんが引くつてことで!」

由南の反論を遮るように、温泉原は深々と頭を下げる。

「——頼むっ、お願い!」

だって、でも——それ、普通、逆じゃない? 普通は年下のナナが引くものでしょ。

由南は心の中で反論したが、本当はそうするしかないことは分かっていた。呑気で無神経な温泉原がこんな真似までしている以上、よほどナナの機嫌を損ねたくない事情があるのだろう。

だいたい、ここで無駄に意地を貫けば、どうなるか。クビを切られるのは間違いなく由南の方だ。温泉原がさらに促してくる。

「な、頼むから、困らせないでよ。分かるでしょ。こういう場合、どうするのが一番利口なのか」分かつているのは、いざとなったら温泉原はあっさり自分を切るだろうということだった。

うつむいた由南は、心の中で何度か深呼吸して、拳を強く握り締めた。私は、悪くないし、間違っていない。だから——表面上の謝罪くらい、なんということもない。

「——申し訳……」

「ど、げ、ざ」

その言葉に顔を上げた途端、ふっと煙草の煙を吹きつけられた。

「聞こえなかった？ そこに土下座して。もっと大きな声で、誠意をこめて謝りなさいよ」

「はあ？ なんて、私がそんなことまで」

「由南ちゃん！」

温泉原に肩を掴まれ、由南は激情を露わにしたまま振り返った。

「なっ、この埋め合わせは絶対にするから。ここは、大人の対応をするってことで」

「いやですよ、冗談じゃない！」

「連載」

温泉原の腕を振りほどこうとした由南は、その囁きに思わず手を止めていた。

「ほら別冊で……、連載枠がひとつ空くんだよ。僕が責任持つて、由南ちゃんを推薦するからさ。なっ、

だから、今日のところはお願いしますっ」

再度温泉原は両手を合わせる。あまりの理不尽さに、由南は指が痺れるほど拳を握り締めた。

いくら連載もらえるからって、普通、土下座まで出来ないでしょ。そう思う端から、貯金通帳の残高、家賃、光熱水費——それらの数字が頭の中をよぎっていく。逆に、断ればどうなるだろう。連載なんてもう二度ともらえないかもしれない。

十七で家を出て九年。人生にもうリセットはきかない。由南にはもう漫画しかない。『ラブリー』との繋がり切れてしまえば、自分は本当に一人ぼっちになってしまう——

由南は固く目をつむった。それでも、自分が何をやる気なのかよく分からなかった。

土下座？ 本当に？ 本当にその流れ？ 頭では猛烈に拒絶しているのに、足がナナの方に向いたのは何故だろう。現実感はあるでない。目を開けたまま、悪い夢でも見ているようだ。

「ほら、そこにひざまずいて」

その時だった。

「すみません。『ラブリー』編集部はこちらでよろしいでしょうか」

いきなり、低音の男の声がナナの嘲るような声を遮った。

「はいはい、なんですか？ 確かにここは、『ラブリー』編集部ですが」

訝しげに返事したのは、温泉原だった。

由南は、弾かれたようにナナに背を向けた。心臓がドキドキいっている。信じられない。いくら

仕事が欲しいからって、私は何をするつもりだったんだろう。

見れば扉の方から、靴音も軽やかに一人の男が入ってくる。

ひとつボタンのダークなスーツに、磨き抜かれて艶を放つ靴。光沢を帯びたドット模様のタイ。顔は陰になってよく見えないが、すらっとした長身に加え、芸能人みたいに小さな頭をしている。髪を後ろに撫でつけ、襟足が少し長くて——彼が室内に入った途端、インクと泥くさい体臭がしなかつた編集部に、爽やかな香りが流れ込んできたようだ。

温泉原が戸惑うのも無理はない。およそ、漫画雑誌の編集部に入ってくるはずのない人種である。

「社長室にお伺いするつもりでしたが、直接、こちらで話をさせてもらった方が早いと思ひまして」

男は胸ポケットから名刺を取り出そうとしたようだったが、それを遮るように温泉原が言った。

「申し訳ありませんが、社長にアポは？」

「はい、用件は既に伝えてあります。そして了承ももらっている」

この声……どこかで？

由南は眉をひそめた。由南が立っている位置からは、その男の背中しか見えない。

「申し遅れました。私、株式会社ウイキャンの代表取締役をしております、篠原柊哉と申します」

シノハラシュウヤ？

もしかして幻聴？ 最近頻繁に、あの頃の悪夢を見るようになったから。

温泉原の横柄な態度が、悪い虫でも呑み込んだように一変した。

「ちよつ、あの、ウイキャンといえば、今アリコン買収で話題の——いつ、いえいえ、ポータルサ

イト最大手の、あのウイキャンの社長さんですか？」

渡された名刺をためつすがめつ見た温泉原は、いつそう慌てて薄い髪をかきむしった。

「いやいや、これはまた——社長自らなんだって——と、とにかく、こんなところで立ち話もなんですから、ご用件は応接室の方で」

「いえ、ここで」

篠原と名乗った男は柔かく温泉原を遮った。

「社の名刺を渡してしまいました。これは、あくまで私事です。実は、『ラプリー』さんが企画されたコミックのチャリティオークションに、個人的に、非常に興味を持ちましてね」

「いや、はあ、まあ、それはどうも。実は、社内では相当反対された企画だったのでね」

温泉原は少し自慢げに低い鼻をうごめかした。

「落札者のリクエストに添ったコミックを、『ラプリー』誌上に掲載して下さると」

「まあ、リクエストといっても、全部、そのままというわけには参りませんけどね。うちにも商業誌としての最低限のルールがあります。いつてみれば、落札者の半生——もしくは、人生で一番美しかった部分を、うちの作家たちが脚色して、漫画化すると思っただければ」

「入札しましょう」

男が言った途端、えつ、と温泉原の眉が跳ね上がった。

「い、今からですか？」

「今からです。そのために、ここまで来た」

「失礼ですが、社長が……ご自身で？」
「もちろん」

温泉原の目が、困惑気味に他の編集者たちに向けられる。が、当然のことながら、返事が出来る者は誰もいない。

「僕が個人的に入札する件については」

穏やかな口調で男は続けた。

「すでに御社の立花社長の了解を得ています。応募締切りは昨日ですが、落札者に正式通知をする前であれば、特別に入札参加を認めましょうと」

低く唸った温泉原は、渋い顔で傍らの大場副編集長を振り返った。多分、社長に確認を取れと目で指示しているのだろう。ややあつて、携帯を手にした大場が戻ってきて、温泉原に何事か耳打ちした。察するに、話は通ったようだった。

その間、編集部内は奇妙な静寂に包まれていた。ナナ一人が、眉をひそめながら煙草を吸い続けているが、他の者たちは、皆訝しげな目で闖入者の動向を見守っている。

温泉原が、ようやく落ち着いた様子で男に向き直った。

「では、一応は入札をお受けしますよ。ただし現在の最高額はお教えできません。教えてしまったら、出来レースになってしまいますからね。応募いただいた方に申し訳ない」

「もちろん」

篠原の横顔が、微かに笑んだような気がした。

「では、——ごほん、えー、どの先生に？ どういった漫画がお好みなのかは知りませんが、うちの一番の売れっ子は、あそこにおられる秋葉ナナ先生です！」

「坂谷先生に」

その時には既に、由南は恐ろしい衝撃と共に確信していた。

篠原終哉——

優しい塾講師の仮面を被った、最低の最低の最低男。

由南の人生を、目茶苦茶にした男。

一体なんで、一介の塾講師に過ぎなかった男が、ここに——『ラブリー』編集部に、由南でも名前を知っている企業の社長として、乗り込んできたのだろうか。

「坂谷先生？」

奇妙なものでも見るような目で、温泉原はまじまじと篠原を見つめた。

「ええ、坂谷先生で」

篠原は落ち着いた声で繰り返す。

「何か、問題でもありますか？」

「あ、いや——、問題があるわけでは……。ただ坂谷先生は大家で売れっ子ですから、落札するのは厳しいのではないかと」

「五千万」

温泉原がカボンと口を大きく開き、ナナの指から煙草が落ちた。

編集部内は、水を打ったように静まり返っている。

「それで落札可能ですか？ それでは、坂谷先生の一作分の時間と出来上がった作品は、僕のものだと思つてよろしいですね。申し訳ないですが、僕にはあまり時間がない。決まり次第打ち合わせに入りたいのですが、よろしいでしょうか」

4

「さて、坂谷先生」

由南と男が連れてこられたのは、社屋十階にある取締役員用の会議室だった。コーヒーを出しに来た社長秘書が出ていくと、篠原柝哉はさつそく由南に向き直った。

「初めまして、ウイキャンの代表取締役をしております、篠原です」

大きな掌てのひらが差し出される。綺麗な指、手首に嵌まるクロノグラフ。

由南が黙っていると、その手はごく自然に引つ込められた。二人とも、まだテーブルにさえ着いていない。

部屋の隅には、もう一人、由南の知らない男が立っている。

やたら背が高く、厚みのある身体をしている。洗練されたスーツにスポーツ刈りという組み合わせに少し違和感はあるが、真面目な印象の青年だ。篠原のボディガードか秘書だろうか。

「ビジネスの話に入る前に、坂谷先生」

篠原が、穏やかな口調で切り出した。

「最初に申し上げておきますが、落札したのは僕個人でも、これは株式会社ウイキャンの広報企画として行うものですので、そのおつもりで話をお聞きいただければ幸いです。また今後は、ここにいる工藤が担当窓口になります」

部屋の隅に立つスポーツ刈りの男が頭を下げる。

「工藤。今はいい、少し席を外してくれ」

その間、由南はただ呆然としていた。二人きりになり、改めて篠原は由南の方に向き直る。

「座りましょう。チャリティコミックの打ち合わせをしたい。先生にお願いしたい作品のプランはもう出来ています。十分で済ませますので、どうぞお席にお着き下さい」

由南の返事を待たず、篠原は一人で長椅子に腰を下ろした。それでもまだ、由南は呆けたように立ったままだった。

もう、疑う余地はない。

端整で冷たい目元。形のいい薄い唇。膝の上で組んだ指の形まで昔のままだ。

でも——でも、なんで？

由南の混乱をよそに、篠原は淡々とした口調で続けた。

「コミックオークションのルールは熟読しました。あなた方企画者のイメージは、落札者の恋愛体験を、少しばかり脚色してコミック化するというものらしいですが、僕は、そういったリアルな——言ってみれば一人のつまらないノスタルジーを、公衆の目にさらすことを望まない。ウイキャン